

厚別区の障がい児者を支える ネットワークの構築を目指す研修会

～新しい地域福祉の取り組みと厚別における地域福祉のこれから～

報 告 書

日時 平成22年3月20日(土) 13:00-16:00

場所 新札幌アーカシティホテル 5階 アークホール



主 催 ますとびいー
厚別区の障がい児者を支えるネットワークの構築を目指す研修会実行委員会

後 援 札幌市
札幌市厚別区社会福祉協議会

「厚別区の障がい児者を支えるネットワークの構築を目指す研修会」

日 時	平成 22 年 3 月 20 日（土） 13:00～16:00
場 所	新さっぽろアークシティホテル 5階 アークホール
プログラム	<p>1. 開会（13:00） 主催者挨拶 オリエンテーション</p> <p>2. 報告Ⅰ（13:10～14:10） 新しい地域福祉拠点「コミュニティハウス冬月荘」での取り組み 北海道教育大学釧路校 講師 木戸口正宏 コミュニティハウス冬月荘 地域福祉コーディネーター 高橋信也</p> <p>3. 報告Ⅱ（14:20～15:10） 厚別区事例検討会から ①「障がい者で構成される家族の生活困難と支援について」 札幌市障がい者相談支援事業 ますとびいー 相談員 富田君枝 ②「発達障がい児を育てる家族支援の課題について」 社会福祉法人榆の会 きらめきの里 施設長 加藤法子 ③「障がい者と高齢者支援の接点について」 札幌市厚別区地域包括支援センター 社会福祉士 山階綾太郎</p> <p>4. ディスカッション（15:20～16:00） （コーディネーター） 社団法人北海道総合研究調査会 常務理事 五十嵐智嘉子</p>
主 催	ますとびいー 厚別区の障がい児者を支えるネットワークの構築を目指す研修会実行委員会
後 援	札幌市、札幌市厚別区社会福祉協議会
出 席 者	参加者 44 名、実行委員 18 名

1. 報告 I 「新しい地域福祉拠点『コミュニティハウス冬月荘』での取り組み」

(司 会)

厚別区では障がいや高齢、児童といった縦割りの福祉サービスでは解決できない複数の困難を抱えながら生活している家族への支援、安心して暮らせる地域づくりを考えようと、平成 20 年から様々な関係機関が集まって検討会を開催してきました。この研修会は、その厚別検討会のまとめであり、厚別区における地域福祉のこれからを考えるスタートでもあるということで企画しました。



それでは本日のプログラムに入ります。「新しい地域福祉拠点『コミュニティハウス冬月荘』での取り組み」というテーマで、北海道教育大学釧路校講師の木戸口正宏先生と、NPO法人地域生活支援ネットワークサロン事務局の高橋信也さんから報告をいただきます。お二人のプロフィールをご紹介します。木戸口先生は北海道教育大学釧路校で教鞭を取られています。ご専攻は生活指導・生徒指導論で、子どもや若者を取り巻く格差・貧困の問題と社会的自立の課題について、釧路などをフィールドに調査や研究をされています。

高橋さんは釧路湖陵高校を卒業後、様々な職業を経験されたのち、2007 年から地域生活支援ネットワークサロンに勤務されており、現在はコミュニティハウス冬月荘の地域福祉コーディネーターとして冬月荘のすべての事業に携わる他、北海道総合研究調査会の客員研究員としても活躍されています。今日は映像も交えながら、障がいのある方や高齢者、生活保護を受給されている方などが、福祉制度の枠組みを越えて支え合っている取り組みについて報告いただきます。この後の進行は、北海道総合研究調査会の五十嵐智嘉子常務理事にバトンタッチいたします。

(五十嵐)

コーディネーターを務めます社団法人北海道総合研究調査会の五十嵐です。今日はよろしくお願いたします。早速、報告に入っていただこうと思います。

(木戸口)

私は教員養成の大学に勤めており専門は教育学です。青年の自立問題への関心から、子ども・青年の貧困や雇用の困難について研究をしています。子どもの成育や自立という視点から、議論の土台そして後で報告いただく高橋さんの冬月荘の取り組みのベースになるような、釧路地域の現状をお伝えしたいと思います。



子ども・青年の成長・自立という視点から見た時、釧路市に限らず日本全体を覆っている問題でもあると思いますが、大きく 3 つの問題があると考えます。1 点目は子育て世帯の貧困。生まれてから子ども達が学校教育を受けて育っていく中で、非常に大きな貧困の問題に直面しているということがある。2 点目は、数年前からフリーター問題やニート問題として言われていますが、今は学校を卒業した後もなかなか仕事が見つからず、経済的に自立することが難しい。家を出て一人暮らしをしたり結婚したりするこ

ともできないということで、雇用や社会的な自立をめぐる貧困があるのではないかと考えています。3点目は、そういった事柄を背景に、人々が生活をしていくベースとなる地域社会そのものが衰退している状況がある。この3つの視点から、釧路市の現状を紹介していきます。

まず、子ども・子育て世帯の貧困。これは目に見える形で大きく表れていて、釧路市は全国で最も生活保護受給率の高い自治体であるということ。2008年度の釧路市の保護率が46.1%（パーミル）。2009年度の12月には50%を越えるということで、釧路市に住んでいる20世帯のうちほぼ1世帯が生活保護受給世帯になっている状況です。特に釧路市では、北海道固有の傾向でもありますが、生活保護受給世帯には高齢者世帯が多い。これ自体は年金制度の不備という一つの大きな問題が背景にあるのですが、釧路市や北海道の場合はそれに加えて母子世帯の占める割合が全国平均の2倍近くあり、生活保護世帯の2割程度—近年は若干減少傾向にあります—、約16パーセントが母子世帯で占めている状況があります。

母子世帯が多いということは、子育て世帯つまり小中学生や乳幼児を抱えている世帯に貧困が広がっているということでもあります。

生活保護ではないが、釧路市の場合、いわゆる就学援助率が40%程度とかなり割合が高い。就学援助の支給は生活保護基準プラスアルファ程度の収入で測られる。生活保護世帯の割合は5%位ですから、実態としては生活保護受給家庭数の10倍程度の世帯が生活保護基準に近い水準で生活をしながら子育てをしているという状況があります。

そういった経済的な貧困に加えて、社会的な孤立—いじめや不登校—という問題に直面する割合が非常に多いということと、そういったことを周りに相談できる人がいないことから様々な困難を抱えているという状況があります。このような子育て世帯の貧困が、今、釧路市の大きな一つの問題となっています。

それから2点目、青年が学校を卒業した後どのような状況に直面しているのか。これも全国的な傾向でもあるのですが、まず、学校を卒業した後、ほとんどの青年が就職を希望しても、仕事に就くことができないという厳しい状況があります。2009年11月時点の就職内定率が全道で45.2%、釧路市は40.5%で、就職を希望している高校卒業予定者のうち、11月の時点で就職できている人が4割程度しかいない。同時期の求人倍率をみると、釧路は0.38倍で、就職希望者に対して4割弱しか就職口がないという状況がある。その結果、就職者数や就職率が釧路市では低下しています。この20年間を見ても就職者は一貫して減少し、対照的に無業者—いわゆるフリーター、失業状態にある青年—が非常に増えてきています。全国的にはそういった人達の一定数、経済的に余力がある人達は大学進学等をして、とりあえずはある程度居場所を確保できているのですが、釧路市の場合には、進学率の伸び悩みがあります。理由の一つは、道東地域にそもそも高等教育機関が少なく進学できる場所が限られているということがあり、他地域への進学が経済的・物理的に難しいということもあると思います。就職先や進学先が見つからない結果、青年達はどのように動いているのか。これは「生活基盤となる地域社会の衰退」につながり、また北海道全体の傾向でもありますが、高校卒業後も地元で暮らしたい、友人達のネットワークの中で生活したいと思っても、就職先がなくてなかなか実現できない。結果として、道外あるいは道内でも札幌、帯広等への就職によって釧路市から出ていかざるを得ないということがあります。釧路市では20年間で約3万人の人口が減少しています。特に減少が著しいのは、年齢層でいうと0～14歳、これは少子化とも関わりますが、同時にいわゆる20～40歳位の若年労働者層、これは当然そこに住み続ければやがて結婚して子どもを産み育てるという世代でもありますが、そういった世代が就職や進学を機に釧路市からどんどん出ていってしまうということ。あるいは就職した場合でも、派遣労働や請負労働のような形で全国を転々とするため釧路を離れざるを得ないということがあります。一昨年（2008年）の末に日雇い派遣村が日比谷で行われましたが、そこに集った青年や失業者の中にかつて釧路に住んでいたという人達が何

人か記事でも紹介されていました。そういう意味でも、釧路で仕事がなくやむを得ず道外に行ったという人達が、この2008年の金融危機以降、それぞれの地域で仕事も住まいも失い、かろうじて派遣村のような所や公営のサービス等に身を寄せて何とか日々の生活を送っているという状況がある。その意味では、釧路市の貧困というのは、全国的な規模で展開されているというところもあるのかと思います。その結果、現在の釧路市は全体的に高齢化が進み、かつ若い世代の人達が住みづらく、そこから出ていかざるを得ないという状況になってきている。そのような困難の中で、地域づくりをどのようにしていくのか、行政も含めてどのような形でそこに住んでいる人達の生活を支えていくのか。近年、釧路市では様々な取り組みが行われていますが、その一つに全国的にも注目を集めている冬月荘の取り組みがあります。ではここで高橋さんにバトンタッチしたいと思います。

(高橋)

高橋です。よろしくお願いします。今のお話のような背景から冬月荘というものが誕生したということもあります。冬月荘の現場に来て集う人達の声を交えながら、スライドのタイトル、「循環し合う場づくり」というテーマで進めていきます。

冬月荘は、今非常に注目されているのですが、それ単体で収支が成り立っている訳ではありません。冬月荘には母体があり、NPO法人地域生活支援ネットワークサロンという組織が運営しています。マザーグースの会という障がい児の親の会から始まり、そこから独立する形で2000年に法人化されたNPOです。このマザーグースの会は「親も元気なら子も元気」というスローガンで緩やかにお母さん達が集まっている会で、現在もあります。このような親の会というのは、今までは親が我慢して疲弊しながら障がい児を頑張らせて育てるところが結構あったようですが、ここは親が元気なら子も元気というのが特徴です。ネットワークサロンの趣旨は法人のパンフレットに書かれているのですが、最後のくだりが「地域生活支援ネットワークサロンは、どんな人でも思いを語り、元気を充電できる集いの場を提供し、そこに集う人達を結び付け、集まった情報をコーディネートします。そして一人ひとりの思いに応え、夢を着実に実現するために、釧路地域の人や知恵を総動員できるような人と情報のネットワークをつくっていく強い意思を持った事業体として、今年設立します。」僕は2年半程前にネットワークサロンに就職したのですが、この趣旨が非常に気に入っており、皆さんにもぜひ紹介したいと思いました。この「集まった情報をコーディネートする」という部分がネットワークサロンの大きな特徴です。

今日は法人を立ち上げた日置さんの本を受付で販売しておりましてその中にも書いてあるのですが、一人の願いでも必要であればやるということ。それから、事業が生まれていく中には必ず生みの親という人がいます。例えばそれは障がい児のお母さんだったり、地域の不動産屋のおじさんだったりする。うちの法人では岩盤浴もやっているのですが、これは法人とつながりのある不動産屋のおじさんがいきなり「あんたの所で岩盤浴やらないかい？」と話を持ってきたのです。最初は何のことだろうとピンとこなかったのですが、よく考えるとそれまでうちの法人は障害福祉分野が7~8割という大きさをやってきていて、社会が福祉を助けてきた背景がありますが、逆にこれからは福祉の力で地域を再生できるのではないかという逆転の発想で、やってみようということになり岩盤浴を始めました。収支はトントンです。

現在は約20拠点の事業所、130名の雇用、そして事業規模は約3億円というNPOになっています。これは、必要なことをやり続けつくり続けてきた結果なので、大きくしたかった訳ではなく結果的に大きくなってしまったというのが正しい表現です。そして、コミュニティハウス冬月荘につながっていきます。

冬月荘のこれまでについてです。今から約2年半前、2007年9月に釧路市の米町にオープンしました。ここは北電の社員寮だった所で、元々「冬月荘」という名前の寮でした。この時に私は雇わ

れたのですが、それまでは車の塗装をしたり看板を作ったりホテルで働いたりしていたので、福祉については何もわからず、社協と社福の区別がつかない位のところからのスタートでした。そしてもう一人、型枠大工だった人も雇われて、2人で始まったのが冬月荘です。

一番最初の事業として、2007年10月に「きよしクラブ」を実施しました。きよしというのは氷川きよしのこと。一人の若年認知症の女性がデイサービスに通えなくなり、もう5年位、

娘さんとご主人でその方を抱えて非常に大変だったようなのです。色々と周りからのアドバイスもあったそうなのですが、そんな時、ネットワークサロンの相談事業所に何とかならないだろうかという話があった。そこでこの方が普段通える場所を冬月荘でつくろうということになり何が出来るのか話し合いました。この方は氷川きよしのブロマイドをいつも持っていて歌を歌っていたので、これは氷川きよしのサークルをやれば来てくれるのではないかとということで、僕らがギターを弾き氷川きよしの歌をズンズン歌って、来てもらいました。その方以外にも子どもや地域の歌好きな人や知的障がいの方など色々な人が来てくれて、結果的にこの生みの親になった女性が盛り上げてくれて印象的な会になりました。

そして2008年、後ほど説明しますが第1期「Zっと！Scrum（ずっとスクラム）」というのをスタートしています。これは中学3年生の勉強会です。そして2008年1月、初めての住人が入居してきました。2009年1月には、国のふるさと雇用推進事業のフレキシブル支援センターのモデルとして紹介されています。

冬月荘の概要を説明します。コンセプトは2つ。1つ目は「支援が必要な人なら誰でも来れる」ということ。これは先ほど司会の方も話していましたが、縦割りの制度では支援しきれない方や不都合の出る方が沢山いるので、福祉のユニバーサル化が必要だということです。この冬月荘に至る2000年から2007年まで、ネットワークサロンも様々な事業を展開する中で色々な制度の壁にもぶち当たって、結局自主的に事業を行うなど色々やってきたのですが、まずこういったものが必要だろうということ。2つ目は「『支援する・される』がない場づくり」が今後は絶対に必要になってくるということ。福祉の世界では多くは支援する側とされる側があって、支援される側はなかなか力を出せなかったり元気がなくなっていくパターンが多かったり、同じような人が同じような場所で支援を受けていたりする。支援する側も、どちらかというところ「できない人」と決め付けて支援したり、支援しすぎる場合もある。実際、支援する側に力があることがほとんどなのですが、このような「する・される」というものは一切抜いた循環型地域福祉という視点が必要だろうということです。

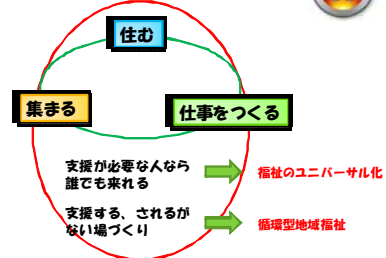
冬月荘をつくっていく間に、一体コミュニティハウスはどうしたらよいのか考えるために、生活福祉事務所の主幹の方や、25年位認知症の家族の会で頑張ってきた方、児童分野の方、道庁の方など色々な方―地域のニーズマスターと呼んでいますが一に集まっていたら、今何が必要かと

コミュニティハウス冬月荘のこれまで

- 2007年9月** 御路市米町にオープン
NPO法人地域生活支援ネットワークサロンが運営
4か月前まで車の塗装をしていた高橋ともう1名
(元型枠大工)が地域福祉コーディネーターとして配属される
- 2007年10月** きよしクラブ
- 2008年1月** 第1期Zっと！Scrumスタート！
(現在、第3期まっ最中！)
- 2008年1月** 初めての住人が居住
- 2009年1月** 国のふるさと雇用推進事業
フレキシブル支援センターのモデルとなる

コミュニティハウスの概要

まずは冬月荘に行ってみましょう！！



いうことで検討した結果、一つはまず住む場所が必要だろうということ。皆さんもまさにニーズマスターだと思いますので、様々な「こういう場所があったらいいのに」ということが普段もきっと沢山あると思います。それから、まずは集まってこないと何も始まらない、集まる中から色々な声が出てくるということです。もう一つは、釧路は先ほど木戸口先生から紹介があったように大変なことになっていて、何よりも仕事がないと生活ができないので、仕事をつくっていかうということです。

冬月荘は、こちらから何かを発信するのではなく、使われてなんぼという考え方です。私はコーディネーターなので、様々な関係機関や個人の方とつながって、色々なことがこうだったらいいな、ああったらいいなということが持ち込まれて、それを事業化するのが仕事。それはネットワークサロンがやってきたことでもあります。

木戸口先生のお話のような背景も沢山あるので、例えば、経済的な理由で塾に行っていない中学生が結構いる、住む所がない少年がいる、日中に高齢者がいられる場所を探している、また子どもを遊ばせながらお茶ができる場所がないかという子育て中のお母さんがいる。他にももっとシビアな課題が沢山あるかもしれない。そういうニーズが集まるたまり場として冬月荘は今まで事業を行ってきています。

集まるということの代表的なものでは、冬月荘と市役所の自立支援プログラムとして「Zっと!Scrum」というものがあります。釧路では生活保護の世帯率と母子家庭の世帯率が非常に高いので、厚労省が平成17年頃、釧路で生活保護の方々が自立できるプログラムをやってみようということで、モデル的に自立支援プログラムが始まりました。うちの法人でも数年間、うちでやっている無農薬の農園にボランティアと一緒に行っていただいたり、子育てカフェで箸袋の紙を折っていただきたくなど色々なことで自立支援プログラムのボラン

ティアを受け入れていました。しかし釧路の背景を考えた時に、大人ばかり支援していてもだめなのではないか、居場所を失っている子どもや塾に行けない子ども、虐待が背景にある子どもがいたりするので、やはり子どもから支援することが必要なのではないかということで、今まで大人のみだった自立支援プログラムの概念を少し変えて、子どもという枠組みでやることにしました。小学生からではなかなか難しいので、中学3年生の受験勉強を無料でお手伝いするということを考えました。当初は市役所が付けた「みんなで高校行こう会」というすごくベタな名前があったのですが、中学生から「やだ、この名前」と言われ、スクラムというのはスクール(学校)とクラム(塾)の造語で、「Zっと!Scrum(ずっとスクラム)」という名前と呼んでいます。塾でも学校でもなく、講師も先生もいない。大人と子どもがありのまま向き合う学習会という位置付けになっています。なので、偉そうに大人が子どもに勉強を教えるということは一切ありません。

では、映像を見ながらメンバーを数名紹介します。(略)

実は、冬月荘の事業というのは、先ほど「集まる・住む・仕事」と言いましたが、単体で存在している訳ではなくて全てがつながっています。例えば、2階に住んでいる方が勉強会の会場に下りてきて自分の気分次第で勉強を教える時もあります。自分のペースで関わっているという形です。それから、中学生が来ることによってお昼ご飯を作らなければならないのでそこで仕事が発生しますし、もっと勉強をわかりやすくするために教材を作るなどの作業も出てきます。資料の左側の写真の中で勉強を手伝っている人は冬月荘の2階に住んでいる人です。大阪から引っ越してきた方なのですが、非常に頑張って勉強を教えています。このように全てがつながっているということです。

集まる

(子ども+大人)×冬月荘+おのりさま

中学3年生の無料学習支援
塾でも学校でもない、
講師も先生もいない。
大人も子どもがありのまま
向き合う学習会。

Zっと!Scrum


メンバー: あやな
メンバー: きよら
メンバー: ふゆか
チューター: おんじ

住む

チューターとして自分のペースで関わっている

仕事をつくる

ランチをつくる教材をつくる



もう一つの例としては、冬月荘とちびっ子、子育てママで親子ランチというのをやっていて、徐々に人気が出てきています。子どもが騒げてお母さんもゆっくりできて食事もできる。冬月荘には元々イタリアンのシェフだった奴がいて一奴というのは僕の友人なのですが一、働いています。彼が作るイタリアンを食べながら、そばで子どもたちがワーワー騒いでいる。この事業の秘密は住人や学生と子どもとの自然な関わりで、勉強に来ただけけれど子どもがいたから遊んじゃったとか、あとはランチを作る・接客や配膳をするということ

で、色んな人達が役立ち合って元気になっているという、一つの良い例です。子どもたちもすごく喜ぶし、何と言ってもお母さん達にとっても安心で、和室を閉めて子ども達を放っておいて2時間でもしゃべっているような時もある。廊下でバタバタ子ども達も遊んでいても誰かが見てくれているだろうということで、僕らも一緒に遊んでいます。

住むというところの役割では、現在10歳代から50歳代の人達が入居しており、相談や見守りがあるということと、食事がついていること、それからシェルターのような役割も果たしています。資料の写真は1階の食堂に集まっているところです。住人がどんな背景を持って来ているかということ、10代の子は、元々虐待を受けていた背景があり、中学生の途中で措置になって児童自立支援施設にいたのですが、もう施設ではやることがないということで、釧路に戻っても大丈夫ではないかと帰ってきたのですが、親と一緒に住みたくないということで住む場所がない状態になった。そこで児童相談所からこちらに相談がありました。住み始めて現在1年半程経ちましたが自動車免許も取り、早く仕事を見つけないと言っています。50代の女性は、生活福祉事務所から、生活保護を受けている方がいるのだが、知的にはボーダーでお金の管理ができないため何回も年金を担保に取られるなど同じようなトラブルに巻き込まれるので何とかしてほしいという話があり、本人に来ていただいたら、

「あら、ここいいわね」と言うので住み始めて今は2年位になります。今日から住むという日に、最初は聞いていなかったのですが、彼女の足元を見たらシーズー一犬を連れてきていた。最初に言ってよ、という話なのですが（笑い）、結局いいよということになって犬と一緒に暮らし始め、今では犬は勉強会で子どもたちの癒しになっています。その他、家族に暴力を振るわれ、今すぐに切り離さなければいけないためにここをシェルターのような場所として入ってきた方もいて、居心地がよくてずっと住んでいます。

住人は住んでいるだけではやはりダメで、ちょっと部屋から出ると中高生がいたり小さい子が走っていたりするので、資料の写真のように「遊んで」などと言われ、気付くと遊んでいる。いつの間にか自分の役割を見つけたり、何となく存在価値を感じる場面があったりして元気になっていく。

住人は住んでいるだけではやはりダメで、ちょっと部屋から出ると中高生がいたり小さい子が走っていたりするので、資料の写真のように「遊んで」などと言われ、気付くと遊んでいる。いつの間にか自分の役割を見つけたり、何となく存在価値を感じる場面があったりして元気になっていく。

今年度やっている事業の中では、ママパワープロジェクトというのがあります。これは助成金を少しいただいて元気循環型地域活性化プロジェクトという正式名称でやっています。無農薬野菜の農園をうちの法人でやって3年位になりますが、1年目は身内で食べたところ結構おいしいということで、2年目は法人本部の前で売ったりもして、3年目はフレンチのお店で使ってもらったところおいしいと言われ、どうも

集まる
(子ども+子育てママ) × 冬月荘 =

親子ランチ
子どもが騒げて、お母さんがゆっくりできる。
その秘密は・・・住人や学生の自然な関わり

住む
幼児のちょっとした見守り、遊び相手

仕事をつくる
ランチをつくる接客、配膳




住む

- 10代～50代が入居
- 相談や見守りがいる
- 食事がついている
- シェルターのような役割も

集まる
役立っている世代を越えた自然な関わり

仕事をつくる



集まる

ママパワープロジェクト
子育て中のお母さんが子どもを預けてほっとしたり、社会参加する機会をつくる

無農薬野菜を使ったお母さん視点のおかず食品づくり



うちの農園で育った野菜は本当においしいらしいのもっと活用できないかと考えました。そこで、子育て中のお母さんが子育てだけではなくて、何か社会とつながる機会があってもいいのではないかと、社会参加する機会をつくるために託児を付けて、お母さん達は農園に見学に行ってお母さん達は農園に見学に行ってお母さん達は農園に見学に行ってお母さん達は農園に見学に行って無農薬野菜を食べてみたり、それを使ってお母さんの視点で子どものために何か作れないかと一緒に考えたり、様々な活動をしてきました。

冬月荘ではホームステイも受け入れています。これは2年前、NPO関係のメーリングリストでホームステイを受け入れてくれないかという連絡が回ってきて、日置さんに「やるかい？」と聞かれ「やります」と言って始まったもので、今年の7月で3回目になります。これは、スクラムメンバーが活躍するいい場面になっています。今のアメリカ人は昔よりも非常に日本文化に興味があるようで、去年の7月に来たのはアニメのグループでした。来た瞬間に皆オタクだとわかったのですが、習字をやったら全員「萌」と書くのです。そんなアニメばかり iPod で聞いているような子達が来た訳ですが、スクラムにもアニメ好きな子がいてセーラー服姿で踊るとアメリカ人も大喜びで踊ってくれたり、あとは縁日を開いたりして、大活躍しました。

最後に、僕が冬月荘に関わって学んだことをお話ししたいと思います。まず、どんな人も環境によって生かされるということをつくづく感じました。役に立ちたいとか何かやりたいということは皆さん思っている。でも今まではそれを発揮されるような環境になかったり「お前できないだろう」などと言われていたりしていた。だから、そのような気持ちが発揮される場づくりが大切なのだということを感じています。それから、何ができるかという能力ではなくて、存在自体が場をつくるということも沢山あると思います。例えばスクラムに来ている第1期生の中には、キディが沢山教えてくれたのに全く勉強ができない子がいる。でもその子が翌年学校を中退になった後遊びに来て、勉強を教える訳ではないのですが、そこにいてだけで中学3年の皆が寄っていき遊びの相手になっており、隊長と呼ばれながら活躍していたりする。そこにいてだけで十分だということが沢山あると思います。それから、「こうあるべき」ではなくて、その人自身に向き合うという視点が非常に大切だと思います。支援となるとどうしても、支援しなきゃという思いが出て「こうあるべきだ」とか「こうなったほうが生活はいいはずだ」というこちら側の考えが働くことがあると思いますが、そうではなく、その人自身にどれだけ向き合うかということだと思います。それから、地域課題は地域づくりの大切なきっかけやヒントになるということです。木戸口先生にお話しいただいたように釧路は課題が山積みですが、だからこそ先進的な事例が沢山出来上がってきています。冬月荘もそうかもしれませんが、自立支援プログラムやソーシャルビジネスの視点でも非常に注目されている。やはり地域課題をただの課題とせず、それ自体をヒントにしてソーシャルビジネスにしていくこともできるのではないかと。

自分は福祉の世界にいなかっただけに、例えば障がい児がいるといったような当事者と言われる感覚に最初のうちはなれなかったのです。僕には子どももいないし、何が自分にとっての当事者なのかと思うと、非常に差を感じて熱い議論の中に入っていけなかった。でもある日、日置さんが「生きているだけで当事者だよ。生活当事者なんだよ」ということを言った時、僕の中で「ああ、なるほど」

集まる

ホームステイプログラム

アメリカの高校生と釧路の中、高、大学生、家族との交流
ウェルカムパーティーはスクラムメンバーが企画！縁日は大ウケ。



冬月荘から学んだ視点

どんな人も環境によって活かされる
「役に立ちたい、何かやりたい」が発揮される場づくり

何ができるかという能力ではなく存在自体が場をつくる

「こうあるべき」ではなく、その人自身に向き合う

地域課題は地域づくりの大切なきっかけやヒントになる

地域課題が雇用を生む可能性がある
ソーシャルビジネス

本当はみんなが地域の当事者
=生活当事者

④みんなが感じる地域課題は？

とすぐくストーンと落ちたのです。生活当事者というのは皆さんも含めて全員に当てはまることなのだろうと思います。

最近の僕のテーマは、「目的・役割は自分で決められて、気付いたら役立っている場づくり」ということです。この1年間、冬月荘を中心にコミュニティハウス普遍化事業というのをやってきています。先月2月の27～28日には、全国まじくるフェスタというのを釧路で行いました。これは、地域も分野も関係なく色々な人達が混ざり合っただけで大切なことを声に出しましょうというもの。今回のまじくるフェスタは大好評だったのですが、そこで声に出されてわかった大切な4つの視点を紹介します。1点目は当事者性。誰かに言われて何かをつくるのではなくて、やはりニーズ、必要だという声からつくっていくということ。それは普遍的に大事なことです。2点目は、これからは異文化の融合をしていかなければならないということ。同じ分野でずっと頑張ってきた方は沢山いると思うのですが、やはり発想や視点には限界があるので、異文化をどんどん取り入れていく。冬月荘はまさに完全な異文化です。絶対接触するはずがなかったであろう人たちが触れ合っている。3点目、そこには理解と共感が必要だということです。異文化はお互いの立場があるので、連携とは言われてきたが混ざり合うのはなかなか難しい。でも何か仕掛けをきちんとすれば理解と共感がどんどん生まれていくのではないかと。4点目、明るく元気に、というのはやはり大事だということです。

さらに、そのまじくるフェスタで色々なセッションを開く中でわかったことですが、立場や属性を越えたつながりが非常に大事であるということです。親、子ども、職場での立場、職種、性別など色々な属性があると思いますが、そういったものを越えたつながりを実現できるといいねという話になりました。

今度は札幌で、今年の10月に「大まじくるフェスタ」をやる方向でいますので、ぜひ皆さんにもお集まりいただき一緒にやりたいなと思っています。フェスタの終了後に気付いたのですが、目的・役割は自分で決められ、気付いたら役立っている場というのが本当に居心地がよかったです。皆がそれぞれ目的を決めてそれに参加したからだと思っています。今後は冬月荘も含めてこのような視点から場づくりをしていきたいと思っています。

スクラムでは今の第3期の受験が終わりました。結果も出て3分の2位が合格だったのですが、明日の打ち上げをもって第3期の勉強会は終わりです。ということは、来年の今頃は第1期に卒業した子が就職を迎える時期になる。でも釧路では先ほどお話しした通りの状況があるので、その辺りをふまえて最後にキディからお話をいただきたいと思っています。

(木戸口)

今日、冬月荘の取り組みの報告を聞いて改めて思ったのは、冬月荘に集まっている人達のニーズというのは、ある意味で日本の社会の現実を裏側から照らし出しているのだということです。今、冬月荘第1期の子ども達の話が出ましたが、今の日本は、学校とか会社とか家庭というような非常に限られた居場所しかない。そこでの役割をきちんと果たせる



人間、学校であれば勉強ができて先生の言うことをちゃんと聞く、あるいは友達同士の暗黙のルールを侵さないといった役割や立場を守っている限りはそこに居られるけれど、そうでなければパッと排除される。

会社であればきちんと働けて残業もできて、特に男性であればプライベートも犠牲にすることができるという人間。でもプライベートを犠牲にすることは、最終的には家族を崩壊させることもある。例えば先日NHKの『無縁社会』という番組にも出てきたように、体を

壊して仕事をクビになって家族からも離縁されて、どこにも居場所がないままに全ての社会的な関係を絶ってしまって孤独のままに死んでいくというような中高年男性などの存在がある訳です。

そういう意味で、実は日本の社会では非常に負荷のかかる役割を担わなければ居場所がないという状況があって、そこから排除されて居場所がなくなってどうしようということになっている。

でもその中で、大人だろうと子どもだろうと属性や立場を越えて、元々自分自身が持っている力を発揮できる場、あるいは高橋さんもおっしゃったように自分自身がそこにいるというだけで認められる居場所をつくっていきこうという形で冬月荘がやっていることは、今の日本の社会の中では非常に重要な役割や方向を指し示していると感じます。先ほどの映像でおんじさんが言っていました、ふらっと来てそこに居られる居場所というのが、おんじさんのような立場の人でもそうだし、子育て中のお母さんや学校で居場所がない子どもたちにとってもそうですが、本当に限られているということがあるので、その場をどのように広げていけるのかということが、これからの釧路でも非常に大きな課題になっていると考えています。以上で報告を終わります。

(五十嵐)

かれこれ4～5年前、日置さんがこのコミュニティハウスをやりたいと言い始めた時、私と日置さんは道州制推進道民会議でメンバーとして一緒におりまして、その時に日置さんが、道州制のモデル事業という形で位置付けたのがこのコミュニティハウスでした。なぜ道州制かということ、地域の住民が地域で決められることが道州制の本当の意味であり、地域のことは地域で決めて地域で解決しようということ。それを具体的に示すのが一つはコミュニティハウスだということで、枠組みを越えたところで高齢者でも障がい者でも子どもでも誰でも集える場というのを道州制特区で内閣府に申請したのですが全然認められない。でもそんなものはどうでもいいから、実際やろうよと動き始めたということです。

高橋さんは、このことではなくこの考え方を全国に広めるとおっしゃっていましたが、私達も全道にこのような考え方を問いかけてみて、地域で地域に合った形で地域の方達が取り組めればいいなと思い活動を始めているところです。

2. 報告Ⅱ<厚別区事例検討会から>

①「障がい者で構成される家族の生活困難と支援について」

札幌市障がい者相談支援事業 ますとびいー 相談員 富田君枝

(富 田)

ますとびいー相談員の富田と申します。よろしくお願ひいたします。

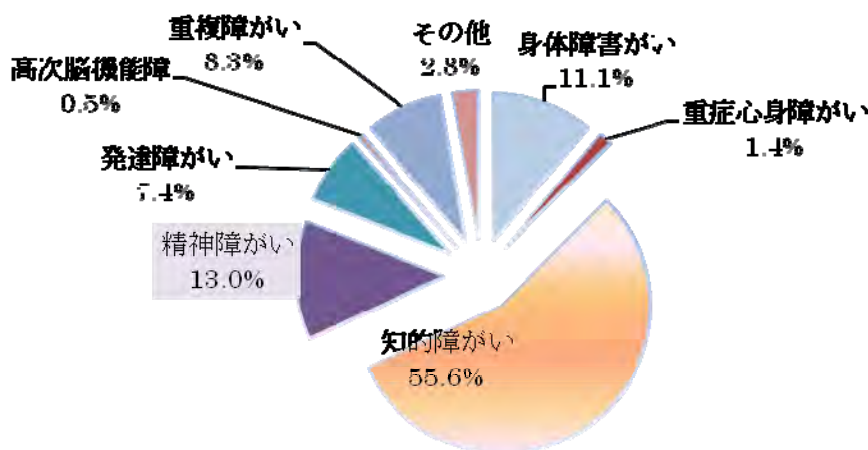
相談支援事業というのは、障がい者の自立支援法の中で市町村が行うメニューとして位置付けられています。具体的には、障がいのある方やご家族や地域の方から、障がい児や障がい者、その家族の方の生活などに関する相談を受けて、関係機関や地域と連携しながら課題解決に向けて必要な支援を行います。北海道知事の指定を受けた相談支援事業者に札幌市が委託をする形で、NPO法人わーかーびいーの相談部門ますとびいーが平成20年10月から委託を受けて行っています。

相談概要について説明すると、障がい別の内訳では、知的障がいの方が55.6%、精神障がいの方が13.0%、身体障がいの方11.1%。また、身体と知的、知的と精神、精神と身体を併せ持つ方や発達障がいなどとの重複の方が8.3%という状況です。全体として見ると6割位が知的障がいの方になります。実際に相談を持ち込む方の内訳は、当事者であるご本人からが17%。8割以上は家族や関係者からという状況になっています。内訳の項目の相談機関というのは知的障がい者の更生相談所や、ハロ

一ワークなどの就労関係、障がい関係に携わる相談機関、ケアマネージャーさんなども関係します。事業所というのは居宅介護事業所や就労関係の事業所などで、関わっている課題について相談を持ち込まれることがあります。地域包括支援センターからの相談もあります。弁護士からの相談というのは、自己破産の相談を受けたのだがその方に他の課題があるケースや、刑務所から地域に出た後のサポートに関する相談、犯罪を犯して裁判の被告となった人に障がいがありどうすればよいかといったことです。このように様々な方から相談を受けている状況ですが、本人以外の特に家族からの相談が多いということでは、サポートは必要なのだが本人の問題意識や意向とは必ずしも合っていないという部分で、支援の難しさも日々感じています。

具体的な相談内容を棒グラフにまとめています。障がい児と障がい者では少し特徴が違ってきますので区分けしています。なお、一つのケースの中で必ずしも要望・課題が一つとは限らない。そのためグラフの数字と相談申込者の合計数は一致していません。例えば障がいを持つ方でグループホームに入って家族分離を図るというケースでは、生活保護の申請や、日中のサービス・活動先につなげたり、成年後見制度も活用するなど、いくつもの支援を重ねていく必要がある場合もあります。

【障がい別内訳】

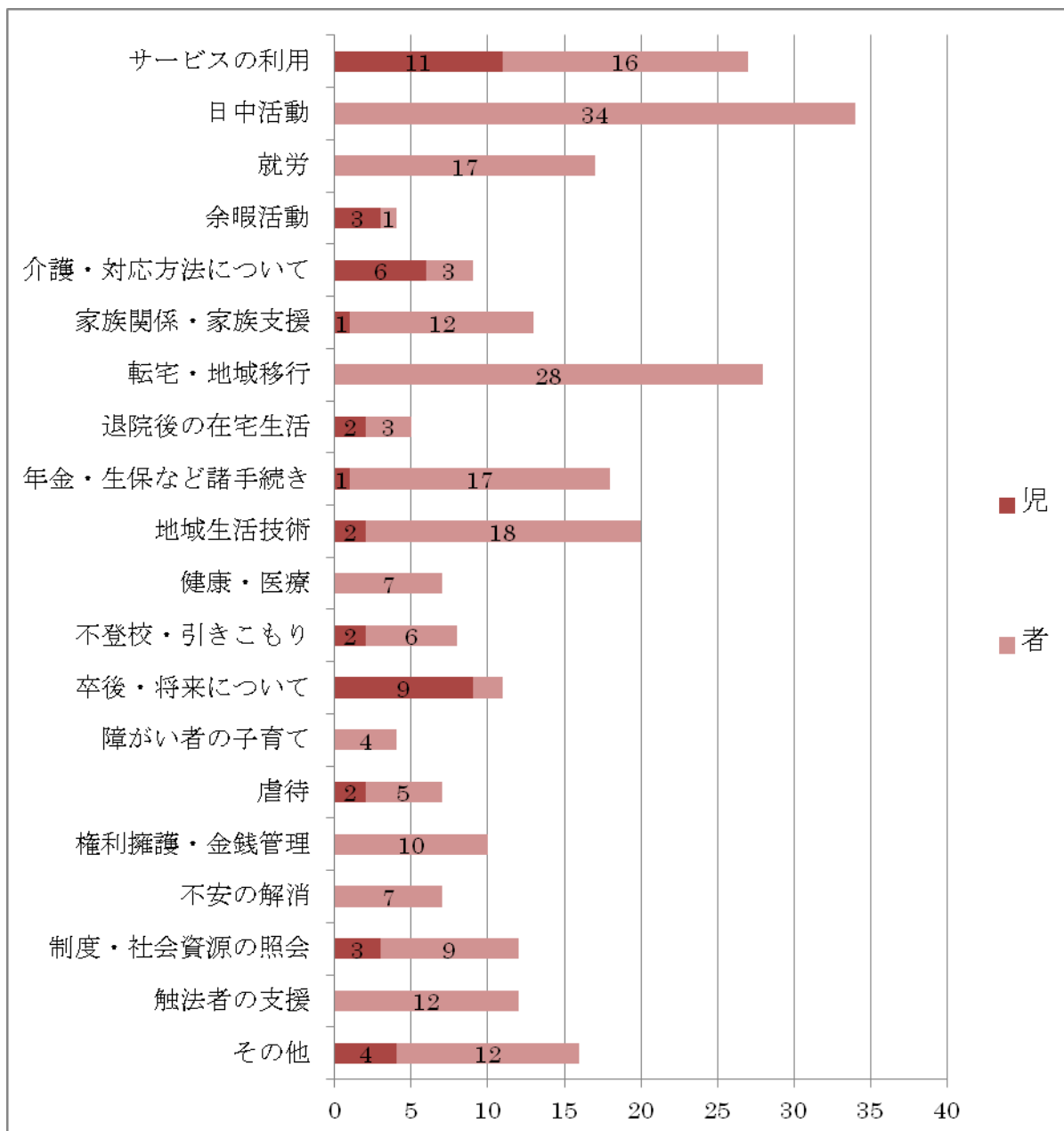


項目について補足すると、地域生活技術というのは地域での暮らしの中で、例えばゴミ出しの方法がわからないとか、家に班長さんが回ってきた時にどうしたらよいかわからないとか。後ほど事例にも出てきますが、飼い猫が次々と出産するのだがどうしたらよいかという相談もあります。また、知的障がいのお父さんやお母さんから子育てがうまくできないといった内容の相談もあります。権利擁護・金銭管理では、日常生活自立支援事業という金銭管理をサポートする事業につなげたり、成年後見制度を活用したり、また自己破産の手続きなどをすることもあります。制度や社会資源に関する問い合わせでは、フォーマルなサービスの中ではなかなか解決しない課題についての相談や、サービスの仕組みなどを知りたいという相談もあります。

では、本題に入ります。地域の中で、私達が日ごろ支援させていただいている家庭のなかには、複数の障がいのある方がいらっしたり、複雑な課題があったり、うまくサービスが結び付かないケースもあります。日々悩んでいるところですが、今日はそういった事例をご紹介します。

<事例紹介（略）>

【相談内容】



障がい者の支援には様々な方が携わっていますが、介護保険のようにケアマネージャーが全てマネジメントしたり関係者の調整をしたりする仕組みにはなっていません。そのため、生活保護を受けていたり社協のサービスを利用したり就労先があったりと、一つの家庭に色々な形で関わる人がいても、情報を共有できていなかったり、協力して動いていけないという課題があります。また、マネジメントの仕組みがないため自分や親がサービスのマネジメントをしているという場合、本人の意向に沿ったものになっているのかという課題があります。そのため、本人ではなく親が希望するマネジメントになるということもあると感じています。それから、キーとなる支援者がケースによって異なるということがあります。必ずしも介護保険のように相談支援事業所がキーとなる訳ではなく、現在のところ相談支援事業所はもしかすると一番関わりのない存在かもしれません。本人と信頼関係を持っていたり本人に関わっていけるのはケースにより色々で、学校の先生や居宅事業所のヘルパー、就労支援をしている方が生活全般のサポートもしていたりする場合もあり、状況は様々です。そして、現状ではそれらが結び付いていないのが課題。相談支援事業にどこからか言ってきていただくことで初めて私達に関わることができる状況ですが、対象者と直接関わったり、対象者からの信頼を勝ち得るまで

には私達はまだまだ遠い位置にいると感じています。ですから、関わっている色々な支援者が声を掛け合い、課題を関係者皆で共有し検討を行ってその中で役割分担をしながら、支援していけるネットワークをつくっていったらいいのではないかと考えています。また、その人の個別課題としてではなく、地域の障がい者・高齢者やその他の方々にも起こり得る問題、起きているかもしれない問題と考え、地域の課題として捉えて、釧路のようにこれからの地域づくりを考えていったらいいなと思っています。

3. 報告Ⅱ<厚別区事例検討会から>

②「発達障がい児を育てる家族支援の課題について」

社会福祉法人榆の会 きらめきの里 施設長 加藤法子

(加 藤)

社会福祉法人榆の会きらめきの里という知的障がい児の通園施設の施設長をしております、加藤と申します。よろしく申し上げます。榆の会は平成5年に厚別区で重症心身障がい者の学校卒業後の地域生活の場としてスタートしました。知的障がい児の通園施設と肢体不自由児の通園施設も運営しており、障がいの重い方と幼児を中心とした支援を行っています。特に小さい子どもを育てているお母さん達と障がいがある、もしくは発達に心配のある段階の子どもが通う療育機関としてやってきています。子どもクリニックにはドクターやセラピストがおり医療を実施しています。



厚別検討会では、発達に心配のある子ども、特に発達障がいと言われているような子ども達を支援していく中で非常に難しいと感じる課題について、皆さんに相談したり話を聞いていただいたりしてきました。検討会に参加して、私達は地域ということをもっと意識しなければいけないのだということにやっと気づき始めたところです。

私達の児童デイサービスや通園施設は、親子で通ってきてもらって療育を提供する場です。1枚ものの資料にあります、保護者がどのような経過で来るのかというと、肢体不自由の場合は病院から、また知的障がいや発達障がいの場合は病院の他、特に発達障がいでは今は乳幼児健診で1歳半など早い年齢から療育機関につながるケースも出ています。こういった背景から、親が子どものコーディネーターとして療育の場に現れることとなります。

先日、杉山登志郎先生の講演を聞きにいったのですが、発達障がいとはつまり発達凸凹（でこぼこ）なのだとおっしゃっていた。今はティーチ・プログラムなど自閉症の方への療育も広がってきて、凹（ぼこ）のところ、つまり苦手としている部分への支援の取り組みはできている。しかし一方で、実は非常に得意な部分があったりオタクと言われる位の人もいたりするのだが、そういった得意な分野に対する取り組みやそれを披露するような場所がないのではないかと指摘をされていました。幼児期は特にその辺りが非常に見えづらい。この子は何が得意で何が苦手なのかということがわかりづらい中で子育てをしているというお母さん達に出会います。まだ1歳半や2~3歳の時点でこの子は発達に心配はあるが障がいだとは言いがたく、お母さんは障がいだとは認めたくない、だけど育児は大変だということで紹介されてやってくる。そうやって私達の前に現れてくる場合であれば、母子の間に我々が入って子どもの代弁をしつつ母親の気持ちも汲み取りながら支援していくことができるが、やはり療育機関は障がい児向けのサービスになるため、障がいだということをお母さんが受け入れ

なければここにはつながってこないという課題、限界があると思っています。育児は大変だが障がいだとは認めたくないというところから母子の愛着関係がちぐはぐになり、やがて虐待につながっていくケースもみられます。子どもには本当はお母さんにこうしてほしいなという思いがあるのだけど、その表現の仕方がなかなかわかってもらえずに1～2年経過すると、「どうせお母さんはしてくれない」ということになる。母親は母親で、子どもは可愛いと思っているが私の言うことは聞いてくれないとか、食べ物だけ与えていけばいいみたいなことで、本当の意味での愛着関係が成立しにくい状況になってきます。私たちは母親の側に「お母さんのやり方はいいよ」とか「今は大変だから無理しなくていいよ」など色々な声かけをして悩みを受け入れて、母親も少しずつ子どものことを認めながら「うちの子やっぱり可愛いわ」とか「うちの子いいところあるわ」と何とかいい母子関係が成立して、たいていは段々と親子の関係ができてくる。



しかし、一方で改善の難しさを感じるのが、親に何らかの疾患や発達障がいがあると思われるケースです。私たちとしては、子どもを療育する場なので母親に対しては子どもにとっての良き支援者という立場をどうしても求める部分がある。つまり、「お母さん」という部分にしか関わらず「発達障がいのある大人」というところを支援できない。我々の法人には病院があるが、それは子どものためのもの。母親に障がいがあり2次的にうつなど精神的な疾患を抱えている場合や幼児期に虐待を受けているような背景があれば、母親自身も何らかの医療的なケアが必要なのだが、子供の療育と合わせて同時進行でできる場所がないことが問題で、またそういったことを理解してくれるお医者さんがいないという問題もあります。お子さんにとってこのお母さんが本当にいいのかというと大変だが、このお母さんの元で育っていくこの子をどう支援していくだろうという悩みは療育機関だけでは解決できないという問題があります。

それから、子育てに祖父母などからの助けがあると、母親の養育が少し下手でも、案外子どもはうまく理解を得ながら支援されて育っていくのだが、母親と祖父母（自分の親）との関係が非常によくはない場合がある。そこに既に発達障がいがあって、さらにその方が親になっているという連鎖の状況があるので、家族から支えられる場がなく孤立した中で、子育ての難しい発達障がいの子を育てる発達障がいの母親という図式になっている。ここは療育機関としての限界であり、常々、解決したいがどうにもならないジレンマを抱えています。

<事例紹介（略）>

この事例の方は発達障がいということではなかなか理解されにくく支援が入りづらい状況があるのだと思う。富田さんが共依存とおっしゃっていたが、発達に障がいのある子を療育に通わせたり、一生懸命学校に対して要望を出していくこと、そして子どもの存在そのものが母親にとってのエンパワメントを高めることになっているので、そこを切り離すことは考えられないだろう。だが、子どもが育つにあたって色々なサービスや機関の支援だけでは不足で、形のあるものだけではない、日常生活の中での見守りや優しい目線といったものが必要ではないかということ。ただ、それを親はできずおじいちゃんおばあちゃんもいない、では誰がやるのかという答えが地域の中になかなかない。生まれてから地域で育つ中で障がいの有無に関わらず切れ目のない関わりをしていくため、専門的ケアも持ちながら、それだけではない緩やかな関わりや見守る支援の態勢というものをつくっていかなければいけないというのが、私の課題です。

4. 報告Ⅱ<厚別区事例検討会から>

③「障がい者と高齢者支援の接点について」

札幌市厚別区地域包括支援センター 社会福祉士 山階綾太郎

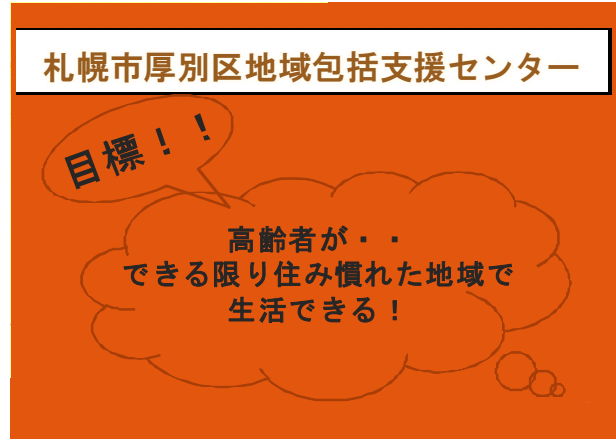
(山 階)

最初に、地域包括支援センターについて説明します。包括支援センターは、平成18年の4月から介護保険法が改正されて全国にできました。簡単に言うと、高齢者ができる限り住み慣れた地域で生活できることを目標に動くところです。大きく4つのことを行っています。1つは、高齢者に関わる相談を受けて、適切なサービスや制度利用につなげる役割。2つ目は高齢者の権利を守ること。高齢者虐待の防止、成年後見制度の紹介、消費者被害への対応などの活動をしています。3つ目は、ケアマネジャーの支援として関係機関の連携体制をつくったり、ケアマネジャーへの支援も行っています。4つ目は、介護保険で要支援1、要支援2と判定された方のケアマネジャーとしての役割、またその状態になる可能性の高い方への支援をしています。これは主任ケアマネジャーと保健師、看護師の3職種で行う形です。

今の4番目の役割で、介護保険の要支援1・2の方のケアマネジャーとしてお宅に訪問することをやっていますが、訪問先の介護保険を使っている高齢者や家族の中に、障がい者向けの自立支援法を使っている方がいることがあります。そのような事例を3つ紹介します。(略)

以上3つのような障がいのある方がいるケースの場合、僕達はどのように動けばよいかとびいーさんにも相談させてもらうことがあるが、やはり一つ一つの事例を積み重ねていき、どのように他分野の方と連携していくと当事者にとっていいのだろうかということを考えていかねばならないと思っています。障がいのある63歳の方がいて、今は自立支援法を使っているのに障がいの分野だと言っている、2年後には65歳で介護保険の対象となる高齢者になる。そうしたら、自立支援法とか介護保険法とか縦割りの話をしている場合ではないのと思うので、皆で協力していければと思っています。

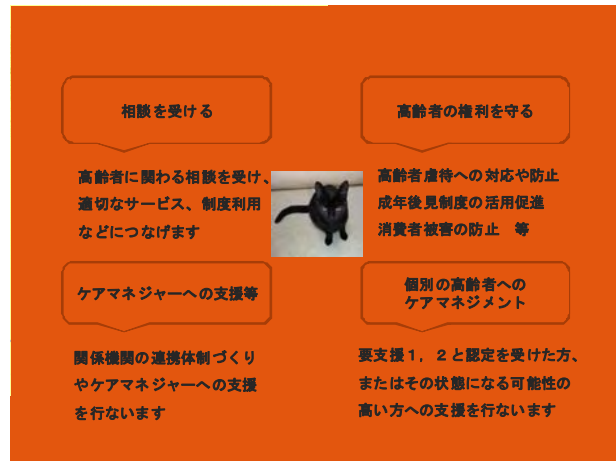
5. ディスカッション



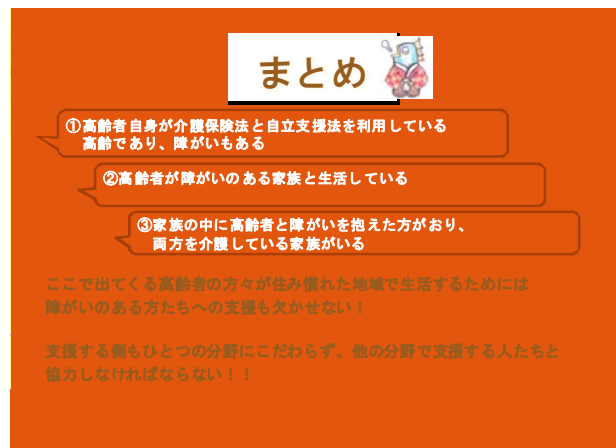
札幌市厚別区地域包括支援センター

目標！！

高齢者が・・
できる限り住み慣れた地域で
生活できる！



相談を受ける	高齢者の権利を守る
高齢者に関わる相談を受け、適切なサービス、制度利用などにつなげます	高齢者虐待への対応や防止、成年後見制度の活用促進、消費者被害の防止等
ケアマネジャーへの支援等	個別の高齢者へのケアマネジメント
関係機関の連携体制づくりやケアマネジャーへの支援を行ないます	要支援1, 2と認定を受けた方、またはその状態になる可能性の高い方への支援を行ないます



まとめ

- ①高齢者自身が介護保険法と自立支援法を利用している高齢であり、障がいもある
- ②高齢者が障がいのある家族と生活している
- ③家族の中に高齢者と障がいを抱えた方がおり、両方を介護している家族がいる

ここで出てくる高齢者の方々が住み慣れた地域で生活するためには障がいのある方たちへの支援も欠かせない！

支援する側もひとつの分野にこだわらず、他の分野で支援する人たちと協力しなければならない！！

(五十嵐)

3人の方の報告を聞いていると、まだまだ縦割りの中で皆さんが支援者として課題を抱えているということがある。そういう方達が、ちょっと窓が開いたような感じがしたと。本人らしさを発揮できるような場とか、何度も出ていた居心地の良さ、そういう場を提供しているのが冬月荘である。その中で、本人を交えながらどういう方向がいいのだろうねと、解決するかどうかは別としてそういうことを話し合える場があるということがすごくいいことなのかなと思いました。高橋さんから、冬月荘的な立場から、例えば障がいのある方の例でこんなことがあったという事例がありましたら、お願いします。

(高橋)

冬月荘の場合は、1つの例では、かなり個性が強いアスペルガーの子が来た時、やはりその個性は簡単には受け入れられず、衝突したりもしたのですが、実は、彼は皆と仲良くなりたいたいだけどうまく表現できずにいた。とにかく本人がその中で関係性を築いていくしかないということで、3日目位に僕が皆に時間をとってもらい、彼がここに来た経緯を正直に話したのです。そのことによって彼らの中で考えるようになっていった。この個性の強い彼とどう付き合うべきかということ普段のシーンの中で話し合ってくれたり、喧嘩になりそうになるとまたそこでも話し合ってくれたりして、最終的には彼が普通にいられる場所になっていきました。それは、彼の力でもあると思います。

場がつくられていく時の僕の中での一番ポイントは邪魔をしないということです。僕のコーディネーターとしての役割は邪魔をしないこと。つつい口を出してしまったり何とかしようとしてしまう支援を、僕は絶対にしないようにしています。そこで皆の力で場がつくられていくということではないかと実感しています。

(五十嵐)

今の3人の方の報告を聞いて、地域の中でこうした需要を支える、あるいは先ほど連鎖という言葉がありました。実は障がい児の発達する環境として保護者のほうにも障がいがあった、そのことに後に気が付いたということもある。そういった連鎖の問題というのも現実を感じている訳ですが、その辺りについて木戸口先生から一言講評をいただければと思います。



(木戸口)

話を伺っていて、青少年の自立支援のところで聞く話と非常に似ているということを感じています。若者の自立塾などに来るケースでも引きこもりなどがあるのですが、両親がある種責任感が強いとか抱え込んでしまって、自分達が面倒を見られる間はひたすら見ていて、自分達が死んだ後どうするのだろうということであるのだが、その時に子どもとして来る方がもう30代、40代というケースがやはり少なくない。例えば学校、会社、地域など色々な目に見える社会的関係から一度外れていくと、本当はそこでニーズがあるのだけれども見えないとか、見えなくさせられてしまって、その中でかろうじて家族の中で日々の生活を何とかしていくということでいっぱいいっぱいになっている。そして本当にどうしようもなくなってしまうというケースが多いと感じています。

当事者にとっては、まず自分達がとにかく頑張ってきたこと、やってきたことについてただ話を

聞いてもらいたいということもあるだろう。その中で今後どのようにしていきたいか考えた時に、中間的な居場所がないということがある。就労支援などでも非常にハードルが高いというか、職場で働くということは、例えばコミュニケーション力、場の空気を読んで適切に人間関係を回していくことができなければその時点ではねられてしまうということがある。他者との関係づくりとかコミュニケーションというところで困難だったり、職場の持っているルールに従わなければそこにいられないということが非常に多い。なので、その中間的な場所、その人が持っている力や特性、今まで生きてくる中で積み重ねてきたものを生かしながらそこで存在が認められるような場というのを経験していくことを通して、少しずつ自分の社会や関係を広げていく場所が本当に必要。地域にそういったつなぎというか中間的な媒介になるような場所があることが、孤立している家庭や障がいを抱えている人達が社会につながっていく上で大事なのだということを改めて感じました。

(高 橋)

今の話にもつながるのですが、先ほど私の報告の中で紹介した、全国まじくるフェスタの「まじくる」というネーミングをしてくれた方が、兵庫県の西宮にある「つどい場さくらちゃん」というところを運営している丸尾さんという方です。その方は、介護する側が集う場所を運営しているのです。なので、向き合わなければならないのは現実的にあると思います。ただ、先ほどの事例にもありましたが、家族が自分の息子とお母さんの介護をしているというケースも、その方が向き合わなければいけない現実はずっとあるとは思いますが、それを受け入れてもらえる瞬間だったり、受け入れられる場という意味では、今の中間的な場というところも含めて、今後は必要なのではないか。それがセンター的なものなのか、対人関係でそういう瞬間や場があるのがいいのか、それはケースバイケースだと思いますが、介護する側とか子育て中のお母さんなどは障がいがあるがなかがろうが頑張っていると思うのです。日置さんは札幌でスクールソーシャルワーカーをしています。学校や先生から「ダメなお母さん」「大変なお母さん」ということで常に見られている人がいる。でもそこで日置さんがよく言うのは、「お母さんは頑張っている。でもとにかくそこを認められている瞬間がない。そこを認めた時に、話はスッとスムーズに進んだりするんだよね」ということ。そういうところは非常に大事だと思います。

(五十嵐)

まじくるフェスタは10月ですか、皆で参加したいと思っていますが、そのような場づくりとして、こんなことがあればもっと支えられる、あるいはつくるためにはどうしたらよいか、厚別検討会の報告者の方から、その辺りのお考えがあれば、お聞かせください。

(加 藤)

障がい者の支援の中でよくピア・カウンセリングといいますが、やはり同じつらさを抱えているような人達が顔を合わせ「私もそうなのよ」と言っていく中でうちに通園をしたりするようなどころにつながってくれば、会うことができるし、会えれば元気になるし、お互いに情報交換してお母さん達で力をつけたりできる。私はお母さん達のことを地域相談員さんと言っているのですが、自分達の家近所に心配な人がいると「先生、実は心配な人がいる」といって連れてくるのです。しかし一方では姿が現れるまでの間をどうしたらいいのだろうというのが見えてこない。札幌などは検診の人数が非常に多くて、保健師さんも「お母さんは一生懸命やっているよね」ということよりも、障がいがないかどうか確かめなければいけない、ここで逃してはいけないというような流れがある。それに加えて、心配だと思うお母さんはあまり検診に行かないという実態もあり、本当に心配がある人ほどつながっていかないことがある。では、それをどこで行うのかと考えると私の中

でも解決が見つからない。でも、地域の中での子育てサロンや、保育園の一時預かりのようなところなど色々な所にちょっと気付きのある人がいて「子育てしているがちょっと大変そうだな」と思ったら、「どうしたの？」と声をかけることで変わることがあるのでないだろうかと思っています。

(五十嵐)

検診に行かないお母さんが増えてくるというのはちょっと大変なことですが。専門的な所に相談していいのかがわからないという人達のほうが実は多いのかもしれない。地域の中にもっと気楽に声を出していけるような、「助けて」と言う前に「実はこんなことがちょっと……」と相談したり話したりする場があってもいいのかなという気が今しました。

山階さん、地域包括支援センターというのは、そのような場づくりみたいなどころでは何かアイデアはありますか。

(山 階)

問題が2つあると思います。まず、全く自分の状況を発信できない人をどのように掘り起こしをしていくか。それから発信はできるが、制度の狭間にいるような人。高齢者だから介護保険、障がい者だから自立支援法というわかりやすいところであれば既存の制度で対応できるけれども、「これは包括支援センターで支援するべき人なのだろうか」と迷う場合もある。その時に、僕ら相談支援の仕事をしている者として「いや、それは僕らの所で支援する範疇ではないので何もできません」と返すのではなくて、「ここではできないのだけれども、ここに行ったらいいですよ」というところをつないであげるといふところまでは相談を受ける者としてやるという心構えを、役所でも障がい分野の相談支援事業所でも介護保険分野の地域包括支援センターでも、どこの相談を受ける場所でも持ってやっていくとよいと思う。

ただ法律は対象を限定せざるを得ず、どうしてもすき間が出てきてしまうので、そのすき間についてはその近くにいる人達が拾っていく心構えを持つことが大事。全く自分では発信できない人は、周りで発見してあげるしかないので、一番身近にいる地域の住民の方だろう。では住民の人が見つけた時に、普段関わりがないと、「なんか認知症のおじいちゃんがいる」とか「障がいを持った家族がいるのだけれども誰も助けてあげる人がいない」というのをどこに相談すればよいかわからない。そこで相談先を広めていけるように、包括支援センターや社会福祉協議会などでは協力して、相互参加型学習会という、地域の人達とサービス事業所や民生委員さんなどが集まって「地域にこのような高齢者がいたらどんなことができるか」ということを話す活動を行っています。分野や仕事に限らず、いかに色々な所に発信して色々な所と話をしていけるか。一度に全てのことはできないので、そういう活動を徐々にやっていって初めて次の段階が見えてくるのではないのでしょうか。

(五十嵐)

色々な立場で色々な場づくりをしている方が沢山いらっしゃると思います。福まちでもやっている、町内会でもやっている、民生委員さんも訪問している、サービス事業者も「うちのサービスはこれだけです」と言わずに何でも聞こうとしている。そういう気持ちが出てきているなということは日々実感しているのですが、それらがいまひとつ、つながれていないのかもしれないということも一方では感じます。

<以下、会場からの質疑は略>

(五十嵐)

地域福祉のこれからということで冬月荘のことなど、色々勉強させていただきました。ちなみに、あの社員寮は土地と建物で 1,500 万円です。やはり釧路の価格はいいなあと、大変かもしれないがそういう意味ではいいこともあるなと思います。それから最後に申し上げたいのは、冬月荘と同じことをどの地域でもする必要はないということです。今、おふたりからもお話しいただいたように、地域において、地域の人が「こういうことをやってみようよ」という発想を持ったところに冬月荘的な発想がある。それは場所としてはどこでもどんな形でも、学校でもサロンでもいいのだろうが、やはり居心地のいい空間、居場所というのは必要なのだなと、つくづく思ったところです。今後皆さんの発想がこのようなコミュニティハウスというものをつくっていくのだということを私たちは勉強しました。改めておふたりに感謝したいと思います。ではこれで研修を終了させていただきます。改めて、高橋さんと木戸口先生に拍手でお礼申し上げたいと思います。それから事例報告者の3人の方にも拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

「厚別区の障がい児者を支えるネットワークの構築を目指す研修会」報告書

発行者：特定非営利活動法人わーかーびいー/ますとびいー

札幌市厚別区厚別中央4条2丁目19-15

TEL 011-299-3856 fax 011-894-3899

発行日：平成22年3月31日